

米打線「打たせて取れ」

1日に行われたソフトボールのジャパンカップ決勝で、日本は米国に敗れて準優勝に終わった。メダルを獲得したシドニー、アテネ両五輪で日本代表監督を務めた宇津木妙子さん(66)が、東京五輪でも最大のライバルになる米国との戦いを分析した。

(聞き手・星聡)

米国打線は甘い球を逃さず打ってくる基本通りの「好球必打」。決勝のように、立ち上がりで3点も取られるとしんどい。「抑えよう」じゃなくてバックを信頼して「打たせよう」という姿勢が大事。我妻(ビックカメラ高崎)のリードは読まれている気がしたな。

日本のバッテリーは、2番手に投げたオースターマンの配球を勉強した方がい



ソフトボールジャパンカップの決勝戦(日本—米国)を観戦する宇津木妙子さん(左)(1日)

いつまでも上野頼み ダメ

い。多彩で鋭い変化球でコーナーを突いて、最後は低めのボール球を打たせて凡打にしている。ソフトボールを知っている感じがするね。

アテネ、北京両五輪でのエースだったオースターマンは、今年代表に復帰した。ブランクはあるけど、「私はこちらなんだ」という「実」を感じる。膝元に落ちてくる変化球には山田(日立)

も苦しんだ。攻略には大振りせずに脇を締めてミートする打撃が必要。安打を放った優(山本、ビックカメラ高崎)のように、右打者がポイントになるだろうね。

顎の骨折から復帰した上野(ビックカメラ高崎)は、ケガの間自分を見つめ直したと思う。焦らずケガにだけは気をつけてほしい。上野がマウンドにいと、米国も目の色が変わるね。

予選リーグの米国戦で打ち込まれた若手は、この大会で緊張しているようでは五輪では投げられない。「上野さん、上野さん」と慕うだけではなくて、ライバル視するくらいでないとチームは強くない。いつまでも上野頼みじゃダメだよ。

米国に勝てる要素は絶対にある。選手たちは「私が打ちたい、守りたい、投げたい」くらいのガツガツさを出して、覚悟を持って五輪に向かってほしい。